

## 薬のチェック No90 正誤表

薬のチェック No90 (2020年7月号) 掲載の「ファビピラビル(商品名アビガン錠)、COVID-19にも無効・有害の可能性が大」の記事の無毒性量、毒性量、致死量とヒト用量の比較に誤りがありました。お詫びし、次のように訂正いたします。

結論は変わりません。

訂正部位	訂正前	訂正後 (太字:訂正か所)
p80、 まとめ、 7-8 行目	観察研究で COVID-19 での用量は、血中曝露量で換算して動物の毒性量とほぼ同じ(マウス、ラット)、ないし約2倍(イヌ)であり、動物致死量の約4割、2歳～学童期の小児には致死量に相当する危険な用量です。	観察研究で COVID-19 での用量は、血中曝露量で換算して動物の <b>無毒性量の2～5倍、毒性量の約半分</b> (マウス、ラット)、 <b>ないしほぼ同量(イヌ)</b> であり、人によっては致死量に相当する危険な用量です。
p80 右下から6行目	臨床用量は毒性量、小児には致死量	臨床用量は毒性量、人によっては致死量
p81 左 1-7 行目	この用量のアビガン曝露量(AUC=1490 $\mu\text{g}\cdot\text{h}/\text{mL}$ )は観察研究[3]の平均用量で得られる1日推定曝露量(1477 $\mu\text{g}\cdot\text{h}/\text{mL}$ )とほぼ一致しています。造血能の低下は抗がん剤に特有の毒性ですし、骨髄抑制で白血球数が少なくなると感染症が起りやすくなります。また、ラット致死量(200mg/kg)の曝露量(3800 $\mu\text{g}\cdot\text{h}/\text{mL}$ )の約4割です。	この用量のアビガン曝露量(AUC <sub>0-t</sub> :単位 $\mu\text{g}\cdot\text{h}/\text{mL}$ 、以下略)は <b>1490</b> (雌雄平均)でした。1日2回投与した場合の AUC <sub>0-t</sub> はおおむね、AUC <sub>0-12</sub> (半日曝露量)に相当します。観察研究の平均的用量(初日 <b>3600mg</b> 、2日目以降 <b>800mg</b> 1日2回、合計 <b>10.4</b> 日使用)[3]で6日目の半日曝露量は <b>739</b> と推定でき、ラットの毒性曝露量のほぼ半分に達しています。造血能の低下は抗がん剤に特有の毒性ですし、骨髄抑制で白血球数が少なくなると感染症が起りやすくなります。また、ラット <b>200mg/kg</b> の致死曝露量(オス <b>3430</b> )は、臨床曝露量の5倍に過ぎません。 一般的に薬剤の血中濃度は、個人差が大きく、平均濃度の5倍から10倍程度になる人がいますから、臨床用量で動物の致死量に達する人がいるはずです。実際、アビガンの代謝(解毒)が遅く、血中濃度が極端に高くなる人は、初日に <b>1600mg</b> 、2日目以降 <b>400mg</b> 1日2回で AUC <sub>0-12</sub> が <b>1743</b> でした。この人が、COVID-19用量を用いると、曝露量は <b>3486</b> に達し、致死曝露量(オス <b>3430</b> )を超えると推定されます。
p81 左 12-14 行目	臨床用量の半分以下の30mg/kg (AUC=659 $\mu\text{g}\cdot\text{h}/\text{mL}$ )ですすでに造血機能の低下の兆候(網赤血球数の減少)がみられています。	イヌの致死曝露量( <b>3836</b> )も、極端に血中濃度が高くなる人の曝露量( <b>3486</b> )とほとんど違いません。また、臨床用量以下の30mg/kg(曝露量 <b>659</b> )ですすでに造血機能の低下の兆候(網赤血球数の減少)がみられています。
p81 左 15-17 行目	60mg/kg (AUC=1285 $\mu\text{g}\cdot\text{h}/\text{mL}$ 、ヒト曝露量より少ない)で12匹中9匹が死亡しています。	60mg/kg(曝露量 <b>1285</b> はヒト平均曝露量の6割、極端に血中濃度が高くなる人の曝露量よりはるかに少ない)で12匹中9匹が死亡しています。